

## 序論——本書の構成と主要概念について

【はじめに】でも触れたように、本書の目的は、われわれが直面している〈自己完結社会〉の成立という事態を受けて、その意味を「人間とは何か」という最も根源的な問いにまで遡りながら論じていくことである。【はじめに】を通じて、読者には本書のおおよそのイメージを掴んでもらうことができたように思える。とはいえ本書の議論を十分に理解してもらうためには、各論へと進む前に、加えていくつかの補助線を用意しておく必要があるだろう。

ここではまず、本書が〈自己完結社会〉の分析を通じて試みたい学術的な意図、【はじめに】でも触れた「現代人間学」の問題意識と方法論について踏み込んだ説明をしておきたい。そして本書で用いる“三つのアプローチ”についての補足を加えたくうえで、本書の全体像を実際の章構成にしたがって紐解き、そのなかで本書の理論的枠組みを構成する主要概念について一通り見ていこう。そしてそのうえで、本書の底本や表記（文体）についての簡単な説明を行っておくことにしたい。

### (1) 不透明な時代における知への危機感

最初に見ていきたいのは、本書の副題ともなっている「現代人間学」とは何かということについてである。「現代人間学」は、これまでの人文科学的な知<sup>(1)</sup>、とりわけ従来の哲学のあり方に対する反省のなかから構想された、ひとつの新しい哲学的方法論である。本書には、〈自己完結社会〉をめぐる分析を通じて、この新たな方法論を実践していくというもうひとつの目的がある。そのため、ここにある問題意識を共有しておくことが、本書を理解するための最初の補助

線となるだろう。

【はじめに】でも触れたように、筆者は今日の人文科学的な知、とりわけ哲学分野における知のあり方に危機感を抱いてきた。それを一言で述べるのなら、今日の人文科学的な知が、全体として、われわれの直面している社会的、人間的現実に対して、有効な説明能力をほとんど失っているように見えることである。例えばわれわれは、いまこの瞬間にも、わずか10数年前の常識でさえ明日には通用しなくなるかのような、激しい変化と不透明性のなかを生きている<sup>(2)</sup>。そして実際われわれは、いままさにコスモポリタニズム（世界主義）、多文化共生、国際平和といった従来の理想が、現実には抗しきれずに瓦解していく様子を目の当たりにしているとも言えるだろう<sup>(3)</sup>。国内に目を向けてみれば、今度は心の病の日常化、高齢化する引きこもり、生涯未婚率の増大、孤独死の蔓延といった問題ばかりが目を見張る。こうした事態は、いずれも急激ではないが生活世界の着実な破綻を予感させるものであり、従来の人権擁護や富の再分配、抑圧の可視化といった視点だけでは到底捉えきれないものを含んでいる。そうした数々の現実に対して、はたして今日の人文科学的な知は、確かな応答ができていけると言えるのだろうか。むしろ従来の人間的理想が無残に破壊されていく様を見て、困惑し、ただただ立ち尽くしているようにも見えるのである<sup>(4)</sup>。

そうだとすれば、一連の事態に対してより大きな責任を有しているのは、おそらく“哲学”だろう。なぜなら哲学こそは、人文科学の実践に不可欠となる“基礎概念”を整備し、人文科学的な知を下支えしていく役割を担うものだからである。人文科学の実践においては、有効な基礎概念があるからこそ、われわれは現実のなかに対象を見だし、何かを問題として切り出すことが可能となる——例えば、理性、自由、平等、権利、連帯、正義、権力、抑圧、資本主義、全体主義といった概念こそ、これまで人文科学において基礎概念としての役割を果たしてきたものであった。したがって今日、人文科学的な知そのものが行き詰まりを見せているのだとすれば、その原因の一端はまさしく哲学にあって、現実と呼応できるだけの十分な基礎概念が整備されていないからだと言うこともできるのである。

では、哲学の実状はどうだったのだろうか。これまでわが国の哲学実践は、

主として海外の諸言説を読解し、紹介し、模倣することによって遂行されてきたと言える。研究者の立場から言えば、権威ある哲学者のテキストを読解したり、海外の新たなトレンドをいち早く国内に導入したりすることこそが、まさしく正統な哲学的方法論だと見なされてきた。そしてこうした方法論は、一面においては、確かに大きな成果をもたらしてきたのである。例えばいま、われわれが母国語で大学の講義を受講し、文系的问题を母国語によって討論できるのも、また『ラーマーヤナ』から『ニコマコス倫理学』まで、古今東西のあらゆる古典を読み尽くすことができるのも、明治期から続くこの高度な“翻訳文化”の賜物だと言える<sup>5)</sup>。加えてその後継者たちが、日夜そうした努力を継続してくれているからこそ、われわれはいまこの瞬間においても、最新の外国語文献を母国語で読むことができているのである。

しかしそうした反面、わが国の哲学的実践はそうした方法論に傾斜していくあまり——【第九章】で見えていくように、それは戦後においていっそう顕著なものになっていくのであるが<sup>6)</sup>——西洋世界の知識文化を後追いすること以外の術を見いださずにいるようにも思える。問題は、そうした後追いが、常々日本社会の置かれた固有の歴史的、文化的文脈を看過したまま、文字通りの模倣と追従に近い形で行われているように見えるということである。前述のように、社会的現実が示しているのは、その「プログラム」の輸入元となる西洋世界でさえ、その基盤は決して盤石なものではないということだろう。むしろ本書で見えていくように、西洋世界の知的伝統の深淵にこそ、今日の人間学的危機を紐解く手がかりが潜んでいる可能性さえある。要するに、従来のように読解や紹介や模倣を繰り返すだけでは、今日の人文科学が置かれた事態を乗り越えることはできないのではないかと、われわれは一方で翻訳文化の優れた伝統を引き継ぎつつも、他方では、それとは異なる新たな哲学的実践を必要としているのではないかと、ということである。そしてそれが西洋世界の後追いではないとするならば、目指されるべきは、あくまで現実世界との対峙を出発点とし、そこからさまざまな“知的実験”を自ら試みていくこと、そして自らが扱って立つべき新たな基礎概念、あるいは世界観や人間観そのものを創出していくこと、ということになるだろう。一言で述べれば、思想を研究対象として扱うだけでは

なく、思想それ自体を創造していくことが求められているのである。

## (2) 「現代人間学」の方法論的特徴と〈思想〉の実践

本書が依拠する「現代人間学」は、そうした問題意識に基づく、ひとつの新しい哲学的方法論であると言える。ここではその特徴について、以下の四つの原則、すなわち①「何よりも優先されるべき〈思想〉の創造」、②「絶対的普遍主義の否定」、③「世界観＝人間観の提示」、④「強度を備えた〈思想〉の希求」という観点から、具体的に見ていくことにしよう。

まず、第一の原則である「何よりも優先されるべき〈思想〉の創造」は、これまで見てきた危機感が反映されたものである。つまり「現代人間学」においては、哲学的な問題を扱う際に、不透明な時代の現実を受けて、思想の創造それ自体が重視される。しかもそこでは、ときに文献学的な意味での精密さや体系性よりも、徹底して新たな着想、新たな概念、そして新たな理論の構築が優先されるということである<sup>(7)</sup>。

ただしこの第一原則には、より深い含意が込められている。そしてそのことを理解するためには、われわれはいったん、そもそも“思想”とは何かという問題について考えてみる必要があるだろう<sup>(8)</sup>。つまり、人間はなぜ思想を生み出すのか、なぜ人間の世界には思想というものが存在しなければならないのかという問題に他ならない。出発点となるのは、そもそも人間は、根源的に世界を了解し、他者を了解するための意味と言葉を必要としている、という存在論的な前提である。例えば人間存在にとって、世界は常に不可解なものであって、決して意のままになるということはない。そこでわれわれが会おう他者もまた、常に計り知れない存在、意のままにならない存在として現前する。それでも人間は、そうした世界において、そうした他者と生きることを宿命づけられているのである。つまり世界や他者との対峙を避けられない人間が、その与えられた宿命と向き合うこと——本書ではこのことを後に〈世界了解〉と呼ぶことになる——そしてそうして紡ぎだされた意味や言葉こそが、思想の起源だと言えるのではないかということなのである。

そのように考えれば、思想の創造が求められる現代とは、人々が改めて世界や他者との了解を必要としている時代であるということの意味するだろう。思想の創造とは、直接的には、その新たな了解のための意味と言葉を実際に創出していくことを意味するのである。ただし、それだけではない。人間存在は遠い古の時代から、その時々々の要請にしたがって思想というものを紡いできた。いまのわれわれを取り巻いている無数の意味と言葉は、まさしくそうした人々によって紡がれ、しかもそれが幾世代ものときを越えて受け継がれてきたものなのである。そのことを思えば、思想の創造が、単に文字通りに意味と言葉を紡ぐことのみを意味しないということが分かるだろう。それは例えば、古の時代において、それを必死に紡いできたであろう無数の人々、あるいはわれわれが決して知りえぬ未来において、いつしかそれを紡いでいくことになるだろう無数の人々に思いを馳せること——本書ではそうした意識が依拠するものを〈存在の連なり〉と呼ぶことになる——そしてそこから、われわれ自身が自らの生きる時代の現実と対峙し、新たな意味と言葉をめぐって格闘していくということの意味しているからである<sup>(9)</sup>。こうして紡ぎだされるもののことを、本書では改めて〈思想〉と呼ぶ。「現代人間学」において「〈思想〉の創造」と言うとき、念頭に置かれているのはこうした含意なのである。

次に第二の原則となる「絶対的普遍主義の否定」であるが、それはこうした「〈思想〉の創造」を試みる際、「現代人間学」においては、それを決して唯一絶対的な意味での「普遍的な真理」として希求することはない、ということの意味している<sup>(10)</sup>。

前述のように「〈思想〉の創造」は、〈存在の連なり〉に思いを馳せ、時代の現実と対峙し、格闘していくことを通じて実践される。それは直接的には「われわれはいかなる時代を<sup>レ</sup>生きているのか」、「この時代に人間をどのように理解すべきなのか」という二つの問いに答えていくことでもあるだろう。ただしそうして紡ぎだされた〈思想〉は、決して唯一絶対という意味での真理になることはない。なぜなら〈思想〉は、例外なく、それを紡ぐものが生きる時代の枠組みによって規定されたものとなるからである。同じ時代を生きるもの同士であっても、見えている現実が同じであるとは限らない。そのため創造された無

数の〈思想〉は、必ず相互に矛盾をはらむことになり、それらがひとつの体系に統合されるということも決してないと言えるからである。

一部の人々は、「それでは意味がない」と言うかもしれない。なぜなら伝統的な西洋哲学においては、「普遍的な真理」を解明することこそが、その至上の目的であるとされてきた側面があるからである<sup>(11)</sup>。その背後にあるのは、この世界には唯一絶対的な真理、理念、価値、正義といったものが存在する——現時点の人類がその具体的な認識に到達しているかどうかは別として——という形而上学的な前提である<sup>(12)</sup>。しかし「現代人間学」は、そうした前提には依拠しない。むしろいかなる〈思想〉も“不完全”であるということに覚悟しつつ、それでも時代の求める“より良きもの”として、人々が〈思想〉を紡ぎ続けていくことを肯定するからである。無数の〈思想〉の試みが、誕生しては消えて行く。「現代人間学」は、そうした〈思想〉のあり方そのものを信頼しているのである<sup>(13)</sup>。それゆえ〈思想〉を創造するものに求められるのは、流行りの言説を習得することでもなければ、超越的な観点のもとで人々を見下ろすことでもない。あるいは「正しさ」をめぐる知的乱闘を繰り返すことでも、「完璧さ」を求めて理論武装に邁進することでもない。そうではなくて、まずは時代に規定されたおのれ自身を問題とすること、そして自らの確信を〈思想〉へと昇華させるべく、座してあらゆる苦しみに耐え抜いていくことであると主張する<sup>(14)</sup>——それを“決断主義”と呼ぶのであれば、〈思想〉の実践とは、まさしくそうした決断を要する実践であるとも言えるだろう<sup>(15)</sup>——。そして世代を越えて互いを触発し、知恵を出し合うことによって、総体的営為としての「〈思想〉の創造」を支えていくことであると主張するのである。

しかし「普遍的な真理」の探求を否定すると言うのであれば、「現代人間学」は、いったい何を指すことになるのだろうか。例えば前述したように、その試みは確かにひとりひとりに現実との対峙を要請している。とはいえそれは、例えば“現場”へと直接足を運んだり、政策的次元において何か“役に立つもの”を提言したりするといったことではない。「現代人間学」が挑むべき舞台は、あくまで〈思想〉の次元にあるからである。そしてこのことに関わるのが、第三の原則である「世界観＝人間観の提示」である。

われわれは先に、〈思想〉の起源には世界や他者への了解があると述べた。注目したいのは、このことが“哲学”にもたらす新たな意味づけについてである。というのも了解を希求する人間の原点に立ち返れば、そもそも哲学も宗教も、あるいは芸術さえも、いずれも何らかの〈思想〉を表現したものであるとは言えないだろうか。そして芸術が、必ずしも言語を用いない〈思想〉の表現であるとするなら、〈哲学〉とは、逆に徹底的に言語を駆使したもの、とりわけ言語的に構造化された理論を駆使して〈思想〉を表現したものであると言えるからである<sup>(16)</sup>。

したがって〈哲学〉には、「普遍的な真理」の探究とは別のところで、やはり固有の役割があると言わなければならない。筆者は先に、哲学には事物の理解に先立つ基礎概念の整備という役割があると述べたが、より厳密に言えば、基礎概念が有効なものとなるためには、諸概念の背景において、豊かな世界観や人間観が広がっていなければならない<sup>(17)</sup>。つまり〈思想〉の表現たる〈哲学〉に求められる真の役割とは、基礎概念の整備を通じて、こうした“世界観”や“人間観”そのものを新たな形で提示していくことにあると言えるのである。実際われわれが経験している今日の知の動揺は、単なる基礎概念の問題にとどまらず、その背景にあるべき世界観や人間観そのものの限界の表れである可能性がある。そうした意味においても、われわれはいまこそ〈哲学〉を必要としていると言えるだろう。「現代人間学」が目指しているのは、そうした現実を受けての〈哲学〉の実践なのである。

とはいえ、われわれが優れた〈思想〉の実践を結実させるためには、例えば理論としての巧妙さ、論理的な説得力を追求するだけでは不十分である。そしてこのことを問題とするのが、第四の原則となる「強度を備えた〈思想〉の希求」である。

まず、ここで「強度」と言うとき、そこには〈思想〉が持つ二種類の潜在力のことが念頭に置かれている。そのひとつは、時代の不確実性や不透明性を前にしても、なおその〈思想〉が耐えうる潜在力のことを指し、もうひとつは、その〈思想〉に備わっている人心を動かしうるだけの言葉の潜在力のことを指している。つまり創造された〈思想〉であっても、それが時勢によって陳腐化

することなく、ときを経てもなお色褪せない何かを残しうるものなのか、そしてすべてが理解しがたくとも、人々の内面に働きかけ、そこに確かな痕跡を残しうるものなのか、ということである。

われわれが「強度を備えた〈思想〉」に至るためには、まずはその〈思想〉が、どれだけ時代を超えた人間存在の本質を掌握しているのか、そしてその言葉が、どれだけ現代における“救い”、すなわちわれわれの必要としている世界や他者に対する了解にまで触れえるものになっているのかが問われるだろう。さらに言えば、それをどれだけ“美意識”として表現することができているのか、このことも重要である。優れた〈思想〉には、優れた理論や表現だけでなく、例外なく優れた美意識が伴っている。われわれ人間には、自らの行いがはたして「美しい」ものだったのかと問い続ける力がある。「現代人間学」が目指しているのは、こうした人間存在の側面をも踏まえたいうえでの、新たな〈思想〉の実践だと言えるのである。

### (3) 本書における三つのアプローチ

本書では、こうした「現代人間学」の問題意識を基底に置きながら、われわれが直面している〈自己完結社会〉について分析を試みていく。ここでは各論に先立つ第二の補助線として、【はじめに】において触れた、三つのアプローチについての補足を加えておこう。本書では〈自己完結社会〉の成立という問題を受けて、そもそも「人間とは何か」という根源的な問いにまで遡っていくことになる。つまり人間とはいかなる存在であり、われわれはその存在をいかなる形で記述することができるのか、ということについて問うことになるのである。そしてそのために用いられるのが、「環境哲学」、「〈生〉の分析」、「〈関係性〉の分析」という、三つのアプローチなのであった。

まず確認しておきたいのは、ここでなぜ複数のアプローチが必要となるのかということについてである。それは端的には、本書で問題となっている人間存在の本質というものが、そもそも単一の次元によっては描ききれないもの、複数の次元を立体的に組み合わせることによって、はじめて描きだすことが可能



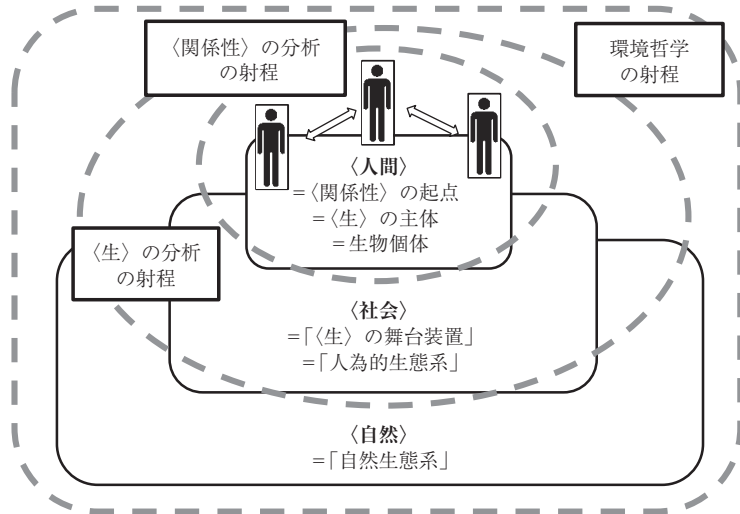


図1 三つのアプローチにおけるそれぞれの射程

図中の〈自然〉、〈社会〉、〈人間〉等については、本書のなかで徐々に明らかにされていくことになるだろう

となるものだと考えられているからである（図1）。

例えば第一のアプローチである「環境哲学」では、人間というものを、その存在を取り囲む〈環境〉との関係性において理解する。このことは人間存在の本質を“外部”の目線から認識すること、つまり人間を客体として、直接的には“生物存在”の一類型として認識することを意味している。ここから浮かびあがってくるのは、進化によって形作られた生物存在としての人間の特性である。その視点はわれわれに、人間存在を説明するうえで最も基盤となる知見を提供してくれるだろう。

とはいえわれわれが「人間とは何か」と問うとき、そこで問題としているのは、必ずしもこうした客体としての人間でない。われわれが求めているのは、日々現実と格闘しながら生きている、主体としての人間のこともであるからである。したがってここで第二のアプローチである「〈生〉の分析」が必要となる。このアプローチでは、人間をその存在がこの世界で実現する〈生〉、言い換えれば“生きる”という具体的な活動のなかから理解しようと試みる。それは

人間存在を“内部”の目線から認識すること、人間という主体の側に立ち、生身の生活者として人間を認識していくことを意味するだろう。ここから浮かびあがってくるのは、はるか古の時代から集団として世界と向き合い、次世代へと〈生〉をつないできたわれわれの姿である。

とはいえ、これらのアプローチだけでもまだ十分とは言えない。なぜなら、われわれが問おうとしているのは、必ずしも生活者としての“われわれ”だけではなく、数多の他者に囲まれて生きる“この私”という存在をめぐる問題でもあるからである。そこで第三のアプローチである「〈関係性〉の分析」が必要となる。このアプローチでは、人間を“自己”と“他者”が織りなす〈関係性〉の構造のなかから理解しようと試みる。それは第二のアプローチと同様、人間存在を“内部”の目線から認識するが、ここで焦点となるのは、集団として世界に向き合う人間ではなく、あくまでひとりひとりの人格的な存在である。ここから浮かびあがってくるのは、他者があつての“この私”であると同時に、独立した人格を持ち、〈関係性〉の負担を乗り越えながら共同を実現していくわれわれの姿なのである。

以上の三つのアプローチは、人間という存在を、それぞれ別の次元において捉えたものである。注目したいのは、それにもかかわらず、ここには人間を理解するためには欠かせない、まったく別の種類の本質が描きだされているということである。このことを、“社会”という概念を用いて考えてみよう。例えば伝統的な社会理論においては、“社会”は大きく二つのモデルを用いて説明されてきた<sup>(18)</sup>。そのひとつは、実体があるのはあくまで個々の人間であると考え、“社会”とは、そうした個人の相互作用が形作る仮想的なものであると見なす立場である。これに対してもうひとつは、個人的な思考や行為であっても、その背後には個人を規定している、やはりある種の実体を伴った“社会”が存在していると見なす立場である。この二つのモデルは、いずれも間違った説明をしていない。重要なことは、双方のモデルが、あくまで別の形で“社会”というものの本質を浮かびあがらせているということなのである。

同じことは、この三つのアプローチについても言うことができる。例えば第一のアプローチにおける“社会”とは、あくまで社会的動物としての人間が作

りあげる社会のことを指している。例えばサンゴ、ハチ、鳥類、他の哺乳類といった多様な社会的動物のなかで、人間の形作る社会の特徴とは何かがここでは問題となるだろう。【はじめに】でも触れたように、「環境哲学」が着目するのは、人間が自然生態系の上層に「人為的生態系」とも呼べるものを形作り、そのなかで生を営む動物であるということである。つまりここでの“社会”とは、単に個体群や集団のことを指すのではなく、主として人間自身が造りあげた、この「人為的生態系」——道具や耕地、建築物などを含む物質的な成分と、社会制度や意味体系、世界像などを含む非物質的な成分の双方を含んだ「社会的なもの」の総体——のことを指すことになるのである。

これに対して第二のアプローチにおいては、同じ“社会”であっても、〈生〉の主体、生活者としての人間にとっての社会こそが問題となる。つまり前述の道具や耕地、建築物、社会制度、意味体系、世界像といった「社会的なもの」は、ここでは「〈生存〉の実現」、〈現実存在〉の実現」、〈継承〉の実現」といった〈生〉の文脈のもと、社会集団の維持や存続にとって不可欠なものとして——われわれはそれを「〈生〉の舞台装置」と呼ぶことになる——理解されることになるのである。

同様にして、第三のアプローチにおける“社会”とは、自己と他者の多様な〈関係性〉、そして〈関係性〉の負担を乗り越えて実践される〈共同〉の背後にあるものとして捉えられる。それは例えば、“この私”が〈関係性〉を理解し、他者と円滑な相互作用を実現するために必要となる〈関係性〉の型——われわれはそれを〈間柄〉と呼ぶことになる——あるいは人々が共同を実現していくために不可欠となる共有された意味や技能、さらには〈役割〉や〈信頼〉や〈許し〉といった「〈共同〉のための作法や知恵」といったものが蓄積されたもののことを意味することになるだろう。

このように本書で“社会”と言う場合であっても、そこでは依拠するアプローチに応じて、まったく異なる側面が問題となる。しかしこれらが、いずれも人間存在にとって本質的な社会の姿であることは間違いない。本書では、こうした複合的なアプローチを用いることによって、人間存在そのものを立体的に描きだしていくことを目指しているのである。

#### (4) 本書の構成について

さて、ここからは本書の構成にしたがって各章の内容について概観し、そのなかで本書を構成する主要概念について触れておくことにしたい。この作業が、本書を理解するための第三の補助線となるだろう。

まず、【第一部】「時代と人間への問い——〈自己完結社会〉への目ざし」では、【はじめに】において素描した〈自己完結社会〉の成立をめぐる本書の基本的な問題意識について、「われわれはいかなる時代を<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>きて<sup>レ</sup>いる<sup>レ</sup>のか」という問いのもとから述べていくことになる。

【第一章】「『理念なき時代』における“時代性”」では、「理念なき時代」という視点から、現代社会が置かれた状況について分析していこう。本書で「理念なき時代」と言う場合、そこには三つの意味が込められている。それは第一に、人間社会の理想をめぐる明確な理念と対抗軸を伴っていた「20世紀」とは対照的に、現代社会はあらゆる対抗軸を喪失した文字通り不透明な時代であるということ、第二に、「20世紀」の枠組みがすでに持続不可能であると認識しながら、われわれは依然としてそうした枠組みを延長することによってしか未来を語れずにいるということ、そして第三に、そうした事態が、われわれの人間そのものを理解し説明するための枠組みにまで及んでいるということである。

本章で注目するのは、情報技術、ロボット／人工知能技術、生命操作技術という三つの技術領域である。そしてそうした現代科学技術が、「理念なき時代」の傍らで、われわれの存在様式にいかなる変容をもたらしているのかについて考えていく。その変容とは、われわれの生活世界を包含する高度な自己調整能力を備えた巨大な〈社会的装置〉の建設、そして人間存在の、そうした〈社会的装置〉に対する圧倒的なまでの依存、すなわち〈自己完結社会〉の成立という事態である。

われわれはここで、【はじめに】でも述べた〈生の自己完結化〉、〈生の脱身体化〉、〈関係性の病理〉、〈生の混乱〉といった、〈自己完結社会〉を説明するための中核概念について再び取りあげることになるだろう。〈社会的装置〉への依存

は、われわれが生身の他者と関わることの必然性を喪失させ、同時にわれわれが身体というものに拘束される必然性を喪失させていく。そして現実社会においては、そうした事態がもたらす矛盾が、すでに対人関係における多大な困難や、生の実感や生きる意味に対する混乱として現れているということである。本章では、こうした〈自己完結社会〉に生きる人間のことを〈ユーザー〉と呼ぶことにしよう。それは〈社会的装置〉に全面的に依存し、〈社会的装置〉がなければ生きていくことができなくなった現代人の姿を比喩的に表現したものである。

そして本章では、締めくくりとして二つの“人間の未来”について予備的な考察を行っておきたい。そのひとつは、〈自己完結社会〉がいつしか限界に達して崩壊してしまう未来の姿、そしてもうひとつは、逆に〈自己完結社会〉が崩壊することなく、極限にまで進行した未来の姿についてである。

【第二章】「人間学の“亡霊”と〈自立した個人〉のイデオロギー」では、これまでわれわれの社会が依拠してきた人間の理想とは何か、そしてその理想に含まれる問題点について見ていく。それは【はじめに】でも触れた〈自立した個人〉の思想、すなわち人間の本質を個人に見だし、それぞれの個人が何ものにもとられることなく、十全な自己判断／自己決定を通じて、意志の自律を達成することを理想とする、ひとつの人間学のことである。

〈自立した個人〉の思想は、戦後の日本社会においてきわめて重要な位置を占めてきた。しかしその思想は、すでに〈自己完結社会〉の成立という新たな事態に対して有効な説明能力を失ってしまっている。本章ではこのことを説明するために、二つの点に着目しよう。ひとつは、そこで想定されている“シナリオ”についての問題である。例えば〈自立した個人〉の思想においては、「自立」を阻むのはあくまで外的な抑圧や強制力であると考えられている。そのためそこでは、「解放」さえ実現すれば、人々は必ず「自立」ということになる。しかし現実には「解放」が進展しても、人々は必ずしもそうした理想的人間類型になることはない。それでも〈自立した個人〉の思想は、そうした現状を、あくまで「解放」の不徹底という形でしか認識することができない。その結果として、際限のない“自由”と“平等”の拡大、絶え間のない「解放」

を求める「無限の循環構造」に陥ってしまうのである。

ただし、より重要なのはもうひとつの点、【はじめに】においても触れたように、この「自立」のための「無限の循環構造」が、実際には〈生の自己完結化〉および〈生の脱身体化〉と表裏の関係にあるという問題である。このことを説明するために、本章では〈ユーザー〉としての「自由」と「平等」という概念を導入しよう。それは、われわれの実現してきた“自由”と“平等”が、現実には〈社会的装置〉への依存によってはじめて実現されるものであるということの意味している。つまり「自立」のための「解放」は、確かに「自由」と「平等」を拡大させると言えるものの、それは同時に〈社会的装置〉への依存を通じて、“他者”や“身体”そのものからの「解放」という問題と地続きの関係にあるのである。このことは、問題解決のための「解放」の拡大が、結果的にわれわれをより深刻な〈関係性の病理〉と〈生の混乱〉に直面させるという逆説を意味しているのである。

以上を通じて【第一部】では、われわれがいま一度、人間存在の本質とは何かという根源的な問いにまで遡らなければならないということ、そして既存の言説に依存することなく、人間存在を新たな形で説明可能な理論的枠組みそのものを構想し、人間存在が“生きる”ことの意味をいま一度問題としなければならないということが提起されるのである。

【第二部】「人間の〈環境〉」の分析と人類史における連続性／非連続性からは、こうした問題意識を受けて、人間存在の本質を説明するための理論的枠組みを実際に構築することを試みていく。【第二部】において焦点となるのは、前述した第一のアプローチ、すなわち「環境哲学」を用いた人間の解明についてである。

【第三章】「人間存在と〈環境〉」では、われわれはまず、「環境哲学」の基本的な枠組みを整備するために、そもそも“環境”とは何か、とりわけ自然科学的な文脈での客観的な環境とは異なる、存在論的な〈環境〉の概念について考える。ここで手がかりとなるのは、“生物存在”に就いての環境とは、主体によって定義される相対的なものであるということ、また特定の生物存在が自らの存在を十全に成立させるためには、そこに固有の環境が不可欠であるという

認識である。

本章ではこうした存在論的な〈環境〉の概念を念頭に、人間存在にとっての固有の〈環境〉、すなわち「人間的〈環境〉」の構造について詳しく分析していく。人間存在が一般的な生物存在と異なるのは、「自然生態系」の表層に「人為的生態系」としての〈社会〉を創出し、その二重の〈環境〉のなかで生を営むという存在様式においてである。ここではその「人為的生態系」が、“物質的基盤”となる道具や耕地、建築物といった「社会的構造物」に加えて、“非物質的基盤”となる、人々を組織化する「社会的制度」、および概念や価値、世界観といったものを含んだ「意味体系=世界像」という“三つの成分”によって構成されていることについて詳しく見ていこう。

この「人為的生態系」としての〈社会〉は、生物個体としての人間にとってきわめて重要な意味を持っている。なぜならそれは、人間によって創出されると同時に、人間自身を成立させ、人間自身を規定するものとして現前するからである。つまり生物学的に「ヒト」として生まれたわれわれは、こうした「人為的生態系」の影響を受けることによってはじめて「人間」となる。またわれわれがいかなる人間として成長するのかということは、影響を受ける「人為的生態系」のあり方によって異なるものとなるからである。加えてこの「人為的生態系」としての〈社会〉は、繰り返し次世代へと受け継がれ、その過程において蓄積されるという特徴を持っている。つまり人間は、前世代から〈社会〉を受け継ぎ、生存の過程においてそれを改変させるものの、次世代にとっては、それが自らを規定する“所与の〈環境〉”として現前する。そして一連の営為が繰り返されることによって、「人為的生態系」としての〈社会〉は、世代を超えて絶え間なく膨張していくことになるのである。

【第四章】「人類史的観点における「人間的〈環境〉」の構造転換」では、この「人間的〈環境〉」の概念を前提に、700万年の人類史について改めて考えていきたい。焦点となるのは、人類史には存在様式の“質的転換”とも呼べるいくつかの“特異点”が存在するという事、そしてそれが人間存在のあり方に対していかなる意味をもたらしてきたのかということである。

第一の特異点は、約1万年前の「農耕の成立」である。人間は自らの生存の

ために食料を必要としているが、「農耕の成立」とは、そのための社会的基盤が人為的な食物網を自ら創出／管理していく形式へと移行することを意味している。この特異点以降、人間によって「自然生態系」の表層に創出される「人為的生態系」は、「社会的構造物」という意味でも、「社会的制度」や「意味体系＝世界像」という意味でも、爆発的に肥大化ようになっていく。本章ではそれを、人間と自然の直接的な関係性が縮小し、両者の間を常に「人為的生態系」としての〈社会〉が媒介するようになるという意味において、「〈人間〉と〈自然〉の間接化」と呼ぶことにしよう。

次に第二の特異点は、「近代的社会様式の成立」である。それは直接的には数100年前の西欧において、「国民国家」、「市場経済」、「化石燃料」を基調とした新しい社会様式が出現することを意味している。この特異点以降、「自然生態系」は科学技術を用いた予測とコントロールの制御下に置かれるようになり、「人為的生態系」としての〈社会〉は、化石燃料を動力としつつ、それ以前の時代とは比較にならないほど爆発的に肥大化していくことになる。「人為的生態系」としての〈社会〉は、ここで「自然生態系」からの直接的な「制限」から外れ、また「自然生態系」との“整合性”を欠いたまま、まさに無限に膨張していくように見えるものとなる。本章ではこのことから、この第二の特異点のことを「〈社会〉と〈自然〉の切断」と呼ぶことにしよう。

問題となるのは、われわれが今日直面している〈自己完結社会〉の成立が、こうした人類史的射程において、いかなる位置を占めるのかということである。われわれはここで、〈自己完結社会〉というものが、700万年あまりの人類史の文脈のもと、いかなる点において連続しており、また連続していないのかという問題について考えていこう。おそらく〈自己完結社会〉は、「人為的生態系」というものを創出し、それを絶え間なく次世代へと継承していくわれわれの本性、そしてその過程で自らの存在様式を繰り返し変容させてきたわれわれの歴史の延長線上にある。しかしそこには、やはり過去との「非連続性」と呼べるものもまた存在するはずである。本章ではそれを第三の特異点、すなわち歯止めを失った「人為的生態系」としての〈社会〉が、今度は人間それ自体との“整合性”までも失いつつある事態であると理解し、それを改めて「〈社会〉と



〈人間〉の切断」と呼ぶことにしたい。

以上の【第二部】の議論において注目すべきは、生物存在としての人間という観点である。これまで人文科学的な知を支えてきた世界観、人間観においては、人間を定義する際、他の生物存在との違いの部分を過剰に意識する傾向があった。そこにあったのは、あらゆる生物存在が本能によって規定されるのに対して、人間のみが理性と自由とを持つがゆえに、生物学的本性から解放されうるといった人間観である。それゆえ人間を生物存在との連続性のもとで語ることは、そこではしばしば危険であるとさえ考えられてきた<sup>(19)</sup>。しかし人間が生物存在の一種であることは疑いえない。むしろ本書では、われわれがそうした連続性と向き合うことによってこそ、新たな人間の〈思想〉を構想していく手がかりが得られると考えられているのである。

【第三部】「人間的〈生〉」の分析と〈社会的装置〉」では、視点を変え、第二のアプローチである「〈生〉の分析」を用いた人間の解明を試みていく。

【第五章】「人間的〈生〉」と「〈生〉の三契機」では、まず「〈生〉の分析」を行うための基本的な枠組みについて整備する。われわれはここで、生活者としての人間、そして生身の人間にとっての等身大の世界である〈生活世界〉に着目しつつ、そうした場を舞台に展開される「人間的〈生〉」の構造について詳しく見ていくことにしよう。

最初に取りあげたいのは、人間存在には、時代や文化を問わず、人間である限り必ず実現しなければならない三つの事柄、「〈生〉の三契機」と呼べるものが存在するということである。それは第一に「〈生存〉の実現」、すなわち生命体として生きる人間が必要物を確保し、そのための素材の加工や道具の製作、知識の集積などを行っていくこと、第二に「〈現実存在〉の実現」、すなわち他者とともに生きる人間が集団の一員としての自己を形成すると同時に、構成員との間で情報を共有し、信頼を構築し、集団としての意思決定や役割分担を行っていくこと、そして第三に「〈継承〉の実現」、すなわち生命体として死を迎える人間が、前世代から受け継いだものを改良しつつ、再び次世代へと引き渡していくことである。

本章では、このことを踏まえて「〈生〉の不可視化」の問題についても掘り下

げていこう。それは現代社会に生きるわれわれが、現実として〈生〉に肉薄しているにもかかわらず、なぜこれほど〈生〉＝「生きる」実感を得ることが困難なのかという問題である。手がかりとなるのは、現代社会においては、「〈生〉の三契機」の実現が、主として〈社会的装置〉への“委託”という形で達成され、人々にはそれらが矮小化された形でしか経験されないということである。われわれはここで、現代における「〈生存〉の実現」は、直接的には〈社会的装置〉に接続するための“貨幣”を調達する「**経済活動**」を意味すること、「〈現実存在〉の実現」は、〈社会的装置〉のもとで、自身が望んだ自己の形を具現化していく「**自己実現**」を意味すること、そして「〈継承〉の実現」は、将来の「**経済活動**」や「**自己実現**」のために課せられる「**学校教育**」を意味することについて見ていく。そして一連の事態を「〈生活世界〉の空洞化」と呼び、こうした現代的な〈生〉のあり方を指して「〈ユーザー〉としての生」と呼ぶことにしたい。

加えて本章の後半では、われわれは「〈生〉の三契機」の起源について、とりわけそこになぜ“三つの契機”がなければならないのかという問題について考えていく。ここではまず、〈生〉の契機において最も根源的なのは「〈生存〉の実現」であるということ、加えて人間存在にとっての〈生存〉とは、常に集団行動によって実現される「**集団的〈生存〉**」を意味するという点について見ていこう。そして人間の集団性が、量的にも質的にも異常なほどに突出したものでありながら、人間の遺伝的単位は個体であること、それゆえわれわれは「私」の〈生存〉と「皆」の〈生存〉をめぐる〈**根源的葛藤**〉を抱えるに至ったのではないかということについて指摘することにした。

実はこのことは、「人間的〈生〉」の文脈から“〈社会〉の起源”を考えるうえできわめて重要な示唆を含んでいる。つまり、われわれが【第二部】において「人為的生態系」としての〈社会〉という形で見てきたものが、もともとはこの〈**根源的葛藤**〉を軽減させ、「**集団的〈生存〉**」を円滑に実現していくための仕組み、いわば「〈生〉の**舞台装置**」として発達してきたものだったのではないかということである。加えてこの「〈生〉の**舞台装置**」としての〈**社会**〉という概念によって、われわれは人間存在が、なぜ「〈生存〉の実現」のみならず「〈現実

存在)の実現」や「〈継承〉の実現」をも必要とする存在となったのか、という問題についても答えられるようになるだろう。つまりわれわれは生物進化の過程において、すでに「〈生〉の舞台装置」としての〈社会〉がなければ〈生存〉を達成できない身体となっている。そしてだからこそ、われわれには「〈生〉の舞台装置」を皆で支えていくための「〈現実存在〉の実現」が求められ、それを次世代に受け渡していくための「〈継承〉の実現」が求められるといったようにである。

【第六章】「〈生〉を変容させる〈社会的装置〉とは何か」では、以上の「人間的〈生〉」をめぐる議論を踏まえることによって、【第二部】において「〈社会〉と〈人間〉の切断」と呼んできた第三の特異点の内実について、再描写することを試みる。

最初に焦点をあてるのは、これまで〈社会的装置〉と呼んできたものに対するより詳しい分析である。とりわけここでは、〈自己完結社会〉の成立において決定的な役割を果たしてきた〈社会的装置〉が、人間存在にとって根源的な「〈生〉の舞台装置」としての〈社会〉に対して、いかなる点で異なっているのかということである。例えば「〈生〉の舞台装置」が発揮する〈根源的葛藤〉の緩和機能と、〈社会的装置〉の発揮する人々の行為の調整機能との間には、明らかな連続性がある。しかし前者が“意味”によって支えられているのに対して、後者は根源的には“意味”を必要としていない。ここから本書では、〈社会的装置〉の本質が、「〈生〉の舞台装置」としての〈社会〉を構成する“三つの成分”のうち、「意味体系＝世界像」のみが縮小し、「社会的構造物」と「社会的制度」のみが異常なまでに突出している点にある、ということについて見ていこう。

本章の後半では、このことを念頭に、第二の特異点から第三の特異点への移行の過程についても詳しい考察を行っていく。われわれはここで、〈生活世界〉の人間的基盤とも言うべき“地域社会”の解体こそが、この移行に決定的な意味をもたらしたことについて指摘しよう。確かに〈社会的装置〉の主要部分は、第二の特異点である「近代的社會様式の成立」に伴って出現してきたとすることができる。しかしおそらく〈生活世界〉が強固な人間的基盤を有しているうちは、「意味体系＝世界像」は〈生活世界〉に担保されており、「社会的構造物」

と「社会的制度」の複合体である〈社会的装置〉は、依然として“補助装置”という形で〈生活世界〉に埋め込まれていた。つまり地域社会の消滅によって〈社会的装置〉が〈生活世界〉から自立化し、人々が〈社会的装置〉に全面的に依存する「〈ユーザー〉としての生」が完成したとき、はじめてわれわれは第三の特異点に到達したと言えるのである。

「人間的〈生〉」をめぐる一連の分析によって、われわれは当初の問題に対しても、異なる視点を得ることができるようになるだろう。まず〈関係性の病理〉に関することと言えば、今日のわれわれは〈社会的装置〉の文脈に立つ限り一—とりわけ「経済活動の倫理」に見られるように——財やサービスを媒介として、人格的要素をほとんど排除したまま、他者と容易に結合することができる。しかしそれとは対照的に、〈社会的装置〉の文脈を少しでも外れてしまうと、われわれは関係性を築いていくために、今度は“私”という人格的存在を「むき出し」にしなければならない。本章では、こうした歪で極端な関係性の背後に、“意味”を不要とする〈社会的装置〉へのわれわれの全面的な依存と、それによってわれわれが自らの内に潜む〈根源的葛藤〉を適切な形で緩和することができなくなっている事態が関わっているのではないかということを描きよう。

また〈生の混乱〉に関することと言えば、われわれは「〈生〉の不可視化」や「〈生活世界〉の空洞化」といった概念を通じて、それが「〈ユーザー〉としての生」というあり方そのものに含まれる問題であるということを確認できるようになると思われる。本章ではここで、われわれが〈自己完結社会〉の成立に至って、はじめて自らがこの世界で「生きる」ことの意味を、時空間的な〈存在の連なり〉の文脈から理解することができなくなったということについて考える。そして〈存在の連なり〉のなかに自らを根づかせることができない人間は、どれだけ私的な願望としての「自己実現」を達成しようとも、他者と関わり、意のままにならない〈生〉の現実に対峙していけるだけの現実感覚を持ちえないこと、意のままにならない世界のなかで、おのれの存在に確信を持ち、それを肯定していけるだけの〈存在の強度〉を保持することはできないということについて指摘したい。

以上の【第三部】の議論において特に注目すべきは、本書が「人間的〈生〉」

の本質を論じる際に、徹底して「〈生存〉の実現」という契機を重視している点である。このことは、これまで人文科学的な知を支えてきた世界観、人間観において、人間の本質を問題にするうえで、この契機が十分に意識されてこなかったことを踏まえてのことである。われわれは【第五章】において、それを「暮らしとしての生活」に對置される「精神としての生活」と呼ぶことになるが、そこには人間の〈生〉の本質が〈生存〉から切り離れたところ、〈生存〉を超えたところにこそあるという信念が潜在しているように思える。しかし人間的な〈生〉の根底には、歴然として〈生存〉の問題が横たわっているのであり、本書では、この問題を考慮しないいかなる人間学も、人間の〈生〉の本質を掌握することはできないと考えるのである。

【第四部】「人間的〈関係性〉」の分析と〈共同〉の条件」では、視点をさらに移し、第三のアプローチである「〈関係性〉の分析」を用いた人間の解明を試みていく。

【第七章】「〈関係性〉の人間学」では、「〈関係性〉の分析」を行うための基本的な枠組みについて整備する。われわれはここで、人格的な人間が形作る「人間的〈関係性〉」の構造について詳しく見ていこう。

最初に焦点をあてるのは、そもそも“自己”とは何か、“他者”とは何かという問題である。われわれはここで〈他者存在〉とは、自己にとって本質的に「意のままにならない存在」であること、またそれゆえ自己との間に「意味のある〈関係性〉」が成立しうるすべてのものという形で定義しよう。そしてこのとき〈自己存在〉とは、決して〈他者存在〉から切り離されては存在することができず、常に特定の〈他者存在〉に対する「私」でしかないこと、われわれが“自己”だと認識しているのは、こうした無数の他者との「意味のある〈関係性〉」を通じて現れた無数の「私」を、あくまで漠然と捉えたものであるということについて見ていく。本章では、この自己と他者の間にある根源的構造のことを「〈我-汝〉の構造」と呼び、〈自己存在〉の背後にあって、相互に影響しあう無数の「〈我-汝〉の構造」のことを指して「〈関係性〉の場」と呼ぶ。そしてそこから立ち現れてくる〈自己存在〉のことを〈この私〉と表現することにしよう。

続いてわれわれは、ここから具体的な人間相互の〈関係性〉——現存する顔見知りの人間である「中核的他者」における〈関係性〉——に目を向け、そこにはさらに、〈間柄〉と〈距離〉という二つの“仕組み”が存在するというところについて見ていく。〈間柄〉とは、社会的に共有されている特定の“関係性の型”のことを指しており、それぞれの〈間柄〉には、それぞれに相応しい“振る舞いの型”であるところの〈間柄規定〉が含まれている。これに対して〈距離〉とは、この〈間柄〉を互いに解除してもかまわないと考える度合い、〈関係性〉において〈間柄〉に収まらない〈この私〉を、互いにどれだけ表出できるのかを示す概念である。

これらの“仕組み”は、いずれも〈関係性〉に伴う“負担”を軽減し、〈関係性〉を円滑なものにしていく働きがある。そもそも人間が「〈我-汝〉の構造」を通じて他者と向き合うということは、〈他者存在〉の本質が「意のままにならない存在」である以上、互いにとって負担となる。しかしわれわれは、ここで相手と所与の〈間柄〉として向き合うことによって、不用意に〈この私〉と〈この私〉が対峙することを回避することができるのである。ただし〈間柄〉として向き合うことは、ときに不本意な振る舞いを引き受けなければならないということをも意味している。また「意味のある〈関係性〉」が成立するためには、われわれは依然として、どこかで〈間柄〉に塗りつぶされない〈関係性〉を必要としている。したがってわれわれは「中核的他者」と〈関係性〉を結ぶ際、〈間柄〉を活用しつつも、相手との〈距離〉に応じて、ときに敢えて〈間柄〉の仮面を外し、「〈我-汝〉の構造」を通じた〈この私〉と〈この私〉としても向き合おうとするのである。本章では、〈関係性〉において生じる一連の負担のことを、三つの「**内的緊張**」という形で整理しよう。そしてわれわれが円滑な〈関係性〉を築いていくためには、こうした〈間柄〉や〈距離〉の活用が不可欠となるものの、それによって〈関係性〉から負担そのものを完全に排除することはできないということを指摘したい。

続いて本章では、【**第三部**】で考察した〈自己完結社会〉における〈関係性〉のあり方についても、より詳しい分析を行っていく。例えば【**第六章**】で見てきたように、現代社会においては、〈関係性〉が〈社会的装置〉の文脈に基づく

かどうかによって、その形態は著しく異なったものとなる。このことを「〈関係性〉の分析」から捉え直すと、以下のようになるだろう。まず、経済活動やインターネットのように〈社会的装置〉の文脈に根ざした〈関係性〉の場合、われわれは互いの人格的要素を消してしまえるほどの強力な〈間柄〉を仲立ちにするか、〈社会的装置〉が備える“配置の機能”に依拠することによって、比較的容易に〈関係性〉を成立させることができる。しかし〈社会的装置〉の文脈から外れ、互いに〈ユーザー〉として対面しなければならない場合、そこでは〈間柄〉が欠落する、ないしはきわめて脆弱になることによって、われわれは互いに適度な〈距離〉を測ることができず、結果として〈関係性〉の成立が難しくなってしまうのである。本章では、こうした極端な〈関係性〉のことを指して「0か1かの〈関係性〉」と呼ぶことにする。そしてそうした事態においては、人々は〈関係性〉をやり過ぎそうとして「底なしの配慮」に陥るか、肥大した自我であるところの「この私」同士による「存在を賭けた潰し合い」に陥るために、互いにとって〈関係性〉自体が多大な負担となるということについて指摘したい。

加えてここでは関連するいくつかの問題についても取りあげる。まず「**ゼロ属性の倫理**」とは、あらゆる〈関係性〉に、社会的な立場や属性に関わる概念を持ち込むことなく、ひとりひとりに「かけがえのないこの私」として接しなければならないとする倫理のことを指している。この倫理の背景にあるのは、人間はあらゆる抑圧や権力関係から無制限に解放されなければならないとする〈自立した個人〉の思想である。本章ではこの倫理が、いかなる〈間柄〉をも不当な抑圧として理解してしまうがゆえに、人々から苦しみを取り除こうとして、かえって「0か1かの〈関係性〉」を促進してしまうことについて指摘しよう。また「0か1かの〈関係性〉」が「この私」同士の「存在を賭けた潰し合い」に陥る背景には、おそらく現代を生きるわれわれが、無意識のうちに「意のままになる他者」を求めていることも深く関わっている。確かに〈自己完結社会〉を生きるわれわれは、しばしば自身の「ありのまま」を無条件に受け入れてほしいと願いながら、負担となる他者の「ありのまま」については、それを拒絶できることが当然であると考えている部分があるだろう。本章では、「〈ユー

ザ一)としての生」が行き着く「自己実現」とは、結局のところ、こうした肥大化した自我であるところの虚構の「この私」が、「意のままになる他者」をどこまでも都合良く求めるものでしかないこと、しかしどれほど「意のままになる他者」を求めたところで、そこに「意味のある〈関係性〉」が成立することはなく、それゆえそこには「意味のある私」もまた存在しえないということを指摘することにした。

【第八章】「〈共同〉の条件とその人間学的基盤」では、以上の「人間的〈関係性〉」をめぐる議論を踏まえ、そうした人間存在がともに〈関係性〉の負担を乗り越え、何かを一緒に実践していくということ、すなわち“共同性”や“共同体”とは区別される「共同行為」としての〈共同〉の概念について焦点をあてる。そしてそうした〈共同〉を成立させる条件とは何か、という問題について考察していきたい。

本章ではまず、この新たな〈共同〉概念を整備していくために、共同をめぐる既存の言説を「牧歌主義的－弁証法的共同論」という形で整理し、そこに含まれている問題点について確認する。「牧歌主義的－弁証法的共同論」には大きく、「自然主義的共同論」、「共同体批判的共同論」、「自由連帯の共同論」という三つの論点が含まれるのだが、そこではしばしば理想化された前近代の農村が想起され、あたかも無条件に共同が成立していたかのように見なされたり、近代において獲得された“自由な個性”を擁護しようとして、自発性を契機とした“個と共同”の図式的な止揚が語られたりしてきた。しかし本書では、人間存在の〈共同〉が決して無条件に成立するわけではないということ、また“自由選択”と“自発性”だけでは、いかなる〈共同〉も成立しえないということ、[100人の村の比喩]や「掃除当番の比喩」といったモデルを用いて考察しよう。そしてそのうえで、これまでの共同論においては、〈共同〉の“負担”についての認識が決定的に不足してきたことについて指摘したい。

続いて後半では、〈共同〉が成立するためには、「〈共同〉のための事実の共有」、「〈共同〉のための意味の共有」、「〈共同〉のための技能の共有」という三つの条件が不可欠であったこと、さらには円滑な〈共同〉を実現するための“仕組み”として、〈役割〉、〈信頼〉、〈許し〉の原理が存在してきたことについても



見ていこう。われわれはそこで、例えば〈共同〉に際して「〈間柄〉を引き受けるものとしての〈役割〉」の概念や、「担い手としての〈生〉」を引き受ける「世俗や時代を超えた〈役割〉」の概念について、また「素朴な〈悪〉」との対峙によって形作られる「人間一般に対する〈信頼〉」や、この世界を生る人間存在そのものを肯定する「人間という存在に対する〈信頼〉」について、さらには〈共同〉に参加するものに求められる「〈距離〉の自在さに関わる〈許し〉」や、「〈共同行為〉の失敗に対する〈許し〉」などについて詳しく見ていく。人間存在が生きていくためには、「意のままにならない他者」と対峙することが避けられない。こうした「〈共同〉のための作法や知恵」は、いずれも人間が逃れられない〈共同〉と向き合い、その現実のなかで、より良く生きることを問うことによって生みだしてきたものなのである。

本章では以上の議論を踏まえ、再び〈自己完結社会〉の諸相について目を向けていくことにしたい。注目したいのは、現代社会においては、すでに〈共同〉のための三つの条件がいずれも破綻しているということ、そしてわれわれ現代人自身が、すでに〈共同〉を担えるだけの能力の大半を喪失しているということである。それにもかかわらず、現代社会が社会集団としての統合を保持することができるのは、〈ユーザー〉となったわれわれが、〈社会的装置〉の持つ強固な自己調整能力によって、非人格的な形で連帯をすでに達成しているからである。しかし見方を変えれば、このことは人間存在が太古より逃れたいと願ってきた〈共同〉の必然性から、われわれがはじめて「解放」されたということをも意味しているのである。

本章ではここで、現代人が行使している「不介入の倫理」の問題についても考察する。「不介入の倫理」とは、互いに対する介入を拒む代わりに、自身の人生にかかる責任はすべて自らが負うべきだとする倫理のことを指している。「0か1かの〈関係性〉」がもたらす帰結として、とりわけ「底なしの配慮」と「存在を賭けた潰し合い」に疲弊しきった人々は、次第に他者との間に「意味のある〈関係性〉」を築いていくこと自体を断念する方向性へと進んでいこう。「不介入の倫理」とは、実のところこうした人々の苦しみや挫折が反映されたひとつの“戦略”でもあるのである。しかし本章では、われわれがこの「不介入」

という戦略自体に対しても、すでに挫折しつつあることについて指摘したい。なぜなら、われわれがどれだけ〈共同〉から逃れたいと望んでも、〈自己完結社会〉がもたらす「解放」は、結局は不完全なものでしかなく、われわれの〈生〉の現実においては、いずれは必ず逃れられない〈共同〉の負担に直面するときがくるからである。そこにあるのは、〈共同〉の負担から「解放」された時代を生きるがゆえに、かえって迫り来る〈共同〉の重圧に耐えられないわれわれの姿、そして〈共同〉から逃れられると信じ込み、〈共同〉を避け続けてきたからこそ、突如として降りかかる〈共同〉に対して失敗を余儀なくされる、皮肉に満ちたわれわれの姿なのである。

以上の【第四部】の議論において注目すべきは、「人間的〈関係性〉」を分析する際、本書が繰り返し〈関係性〉や〈共同〉に生じる逃れられない負担について言及していることである。これまで人文科学的な知を支えてきた世界観、人間観においては、人間関係に生じる問題は、常々そこに内在する“権力性”や“抑圧”の文脈において理解され、そうした権力や抑圧からの「解放」こそが、その典型的な解決方法だと見なされてきた。しかし自由選択と自発性のみによって〈共同〉が成立しないように、すべての人々が満たされ、心地よく思えるような〈関係性〉など存在しない。逆説的ではあるが、それを可能とする唯一の方法は、われわれが完璧な〈自己完結社会〉へと至ることなのである。

続いて【第五部】「〈有限の生〉と〈無限の生〉」では、以上のすべての分析を総合的に捉えたうえで、いよいよ本書の結論部分へと進んでいく。

【第九章】「〈自己完結社会〉の成立と〈生活世界〉の構造転換」では、これまで三つのアプローチを通じて捉えてきた〈自己完結社会〉の成立過程を、今度は「日本社会」というわれわれが生きる具体的な場に即しながら論じていく。つまり日本社会が今日に至るまでの150年あまりを、便宜的に五つの期間に区分し、〈自己完結社会〉が成立していく〈生活世界〉の構造転換について、それぞれの時代の情景を交えながら見ていきたい。われわれはこれまで〈自己完結社会〉へと至る過程を抽象的な概念の範疇において論じてきたが、われわれの過去には、実際には、それぞれの時代の要請と対峙しながら〈生〉を実現させてきた無数の人々が存在する。本章で試みたいのは、そうした人々に思いを馳せ

つつ、過去の出来事を〈自己存在〉に連なる「意味のある過去」として掌握していくことである。そうした姿勢のことを、本章では“生きた地平”に立つと呼ぶことにしよう。

本章では、具体的には以下のように議論を進めていく。まず「第一期：近代国家日本の成立から敗戦まで（1868-1945）」は、日本社会において構造転換の土台が整えられた時代として位置づけられる。というのも、この時代に「官僚機構」や「市場経済」といった〈社会的装置〉の最初の構成要素が整備されたと言えるからである。とはいえその影響力は限定的なものであった。〈生活世界〉の実態から見れば、都市部で花開いた新しい生活様式とは裏腹に、圧倒的多数の人々は、依然として古い時代から続く濃密な〈生活世界〉、生々しい〈共同〉の現実のなかで生きていたからである。

続いて「第二期：戦後復興から高度経済成長期まで（1945-1970）」は、構造転換の“過渡期”に相当する時代として位置づけられる。日本社会は戦後の改革と復興を経て、やがて“豊かな社会”へと形を変えつつあった。それが過渡期であったと言えるのは、そこでは一方において、確かに「〈共同〉のための事実」が浸食され、農村部では生活組織の形骸化が進行していたものの、それでも全社会的に見れば、〈共同〉のための人間的基盤は未だ〈故郷〉の記憶を共有する人々の間で存続していたと言えるからである。本章ではこうした時代に生きた人々のことを、象徴的に〈旅人〉と呼ぶことにしたい。それは〈故郷〉を離れて理想に邁進した人々が、あたかも「母港」を背に大なる「目的地」へと「航海」を続ける旅人のように見えるからである。

続いて「第三期：高度消費社会の隆盛からバブル崩壊まで（1970-1995）」は、本格的な構造転換が進んだ時代として位置づけられる。ここで注目したいのは、この時代に急速に拡大していった〈郊外〉という社会空間についてである。というのもこの〈郊外〉こそ、隆盛していく〈社会的装置〉の“付属物”として形作られ、それゆえ〈存在の連なり〉から本質的に浮遊した社会空間、さらには住民相互の〈共同〉をはじめから想定しないきわめて特殊な地域社会だったと言えるからである。しかし当時の人々にとっては、そうした〈郊外〉での生活こそ、便利で清潔、プライベートが確保される夢の舞台であった。こうし

てかつての〈旅人〉たちが、今度は大挙して〈郊外〉に「定住」していく。そして〈社会的装置〉にぶら下がる〈ユーザー〉となっていくのである。

続いて「第四期：情報化とグローバル化の進展まで（1995-2010）」は、構造転換がさらなる段階へと進んだ時代として位置づけられる。そこでは「情報世界」という新たな〈社会的装置〉の構成要素が成立するとともに、〈郊外〉特有の浮遊性が全社会的に拡大していったからである。本章では、〈郊外〉において生まれ育った新たな世代のことを〈漂流人〉と呼ぶことにしよう。それはこうした人々が、〈旅人〉とは対照的に、あたかも帰るべき「母港」も、向かうべき「目的地」も、あるいは自身の立ち位置を知るための「羅針盤」さえも失った漂泊船のごとき存在に見えるからである。〈漂流人〉は、生まれながらにして〈存在の連なり〉から浮遊し、「〈共同〉のための意味」も「〈共同〉のための技能」も受け継がれることなく成長していく。本章ではこうした人々が、「かけがえのないこの私」という自意識を抱えたまま、自己存在への過剰な期待と、それとは裏腹の自己存在への根源的な不信感とによって引き裂かれ、次第に「諦め」の感情を募らせていく姿について見ていこう。

続いて「第五期：いまわれわれが立っている地点（2010-）」は、進展していく現代科学技術によって、まさしく〈自己完結社会〉が台頭していく時代として位置づけられる。そこでは年を重ねた最初の〈漂流人〉たちによって生み育てられた、〈漂流人〉の“第二世代”が成人を迎えることになるだろう。本章ではそこで、「不介入の倫理」を用いて人間関係をやり過ごそうとしながら、すでにその試みに挫折しつつあるわれわれの姿について改めて見ていくことにしたい。使用可能な〈間柄〉に欠乏し、〈役割〉も〈信頼〉も、そして〈許し〉さえも失ったわれわれは、こうしてときおり迫り来る〈共同〉の必要に怯え、その重圧に苦しむことになる。「意のままになる他者」を希求し、「自分だけの世界」に自閉する人々は、こうして再び「意のままにならない現実」とのあいだで引き裂かれていくことになるのである。

以上の考察を経た後で、本章では改めて、時代において生まれ、時代によって裏切られていく人間存在の残酷さ、そしてそうした残酷さを引き受けなければならぬわれわれ自身の問題について考えていく。加えてそれぞれの時代に

人々が抱いた理想と、「第四期」以降の「諦め」とをめぐる問題について、そして「第三期」以降の時代に、われわれが〈自立した個人〉に代わる人間の思想をついに構築できなかった問題、すなわち「戦後思想」そのものに関わる問題についても触れることにしたい。

【第十章】「最終考察——人間の未来と〈有限の生〉」では、われわれが〈自己完結社会〉の成立という事態を受けて、そうした現実と向き合っていくための手がかりとなるものについて考えていく。

本章では最初に、改めて「世界観＝人間観」という視点を導入することしよう。「世界観＝人間観」とは、われわれが世界や他者と対峙する際、あらかじめ獲得している根源的な理解の枠組みのことを指している。そしてその視点はわれわれに、〈自己完結社会〉を背後で支え、それを促進しているひとつの「世界観＝人間観」の存在に気づかせてくれるだろう。それは「意のままになる生」こそが人間のあるべき姿であると考え、また人間の使命とは、それを阻む「意のままにならない生」を克服していくことであると考え、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」である。

この〈無限の生〉の「世界観＝人間観」は、〈自己完結社会〉の本質を理解するにあたって、きわめて重要なものである。例えば〈生の自己完結化〉を「意のままにならない他者」からの解放と理解し、また〈生の脱身体化〉を「意のままにならない身体」からの解放と理解すれば、われわれは両者の共通点がいずれも“他者”や“身体”といった、これまで人間が決して逃れることのできなかった〈生〉の前提の解体にあるということに改めて気づくだろう。ところが〈無限の生〉の理想からすれば、それらはまさに「意のままになる生」という、人間存在の“あるべき形”が実現していくことを意味しているのである。

とはいえ古い時代においては、こうした〈無限の生〉の理想は決して一般的なものではなかった。本章ではここで、その原型を生みだしたものこそ西洋近代哲学であるということについて見ていこう。注目したいのは、〈自立した個人〉の思想の原型となった「自由の人間学」、そしてそこに内在していた「時空間的自立性」と「約束された本来性」という特異な人間理解についてである。本章ではこうした人間理解が、「政治的自由」の次元を超えて「存在論的自由」

の理想へと拡張されたとき、まさしく〈無限の生〉へと続く扉が開かれたということについて見ていきたい。

それではなぜ、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」は人々に苦しみをもたらすのだろうか。ここで注目したいのは、そこにある理想の形が「現実に取り添う理想」ではなく、本質的に「現実を否定する理想」であること、すなわち現実の外部に“あるべき何か”の理念を定め、そこから絶えず生身の現実を否定しなければならない構造を含んでいることである。“自由”、“平等”、“自律”、“共生”といった近代的価値理念の多くには、実はこうした構造が内在している。「現実を否定する理想」は、「完全な人間」を絶えず求めるがゆえに、決して終着するということがない。それゆえわれわれは、そこで何かが実現する度に、かえってさらなる不完全さを発見してしまうだろう。本章では、こうした「無間地獄」とも呼べる構造こそが、われわれの苦しみの根幹にあるということを目指したい。

そして本章では、こうした「無間地獄」の構造が、〈自己完結社会〉の進展にしたがい、いまやわれわれの〈生〉の全域にまで拡大しつつあるということについても見ていこう。実際われわれは、“自由選択”や“自己決定”という形のもと、「意のままになる生」がかつてない水準において拡大していく時代を生きている。そしていつしか、「意のままになる生」こそが「正常」であり、「意のままにならない生」など「非正常」であるかのような錯覚さえ覚えつつあるようにも見える。しかしだからこそ、おそらくわれわれは苦しむのである。われわれは人間である限り、「意のままにならない生」の現実からは決して逃れることなどできない。それにもかかわらず、〈無限の生〉の理想はそうした人間的現実を直視することを許さないからである。

とはいえ本章では、ここでひとつの思考実験を導入する。それはわれわれの苦しみの根源が、仮にこうした理想と現実の乖離にあるとするなら、進展し続ける科学技術によって、「意のままにならない生」を完全に「意のままになる生」に置き換えてしまえば良いとも考えられるからである。本章では、ここで【第一章】で見た“人間の未来”に関するシナリオ、すなわち〈生の自己完結化〉と〈生の脱身体化〉が極限的に進んだ世界について再考してみよう。例え

ばそれは、遺伝子操作が実現する究極的な平等社会、あるいは身体を完全に捨て去った「脳人間」の世界や、「自殺の権利」が制度化された社会といったものである。そして本章では、そうした究極の「ユートピア」においては、完全なる「意のままになる生」の実現によって、確かにわれわれは根源的な苦しみから解放されるだろうということ、しかしそのためには、われわれ自身が人間であることを文字通り捨て去らなければならない、ということについて確認しよう。

本章の後半では、こうした〈無限の生〉への挫折を踏まえたうえで、われわれにはいかなる道が残されているのかということについて考えていく。そしてその道とは、端的には〈有限の生〉とともに生きるということである。われわれ人間には、人間である限り決して逃れられない何かがある。ここではそれを〈有限の生〉の五つの原則——「生物存在の原則」、「生受の条件の原則」、「意のままにならない他者の原則」、「人間の〈悪〉とわがわいの原則」、「不確実な未来の原則」——という形で整理しよう。確かに〈有限の生〉を生きるということは、一面において、人間が生きることの苦しみや残酷さを受け入れていくことを意味してる。しかしそもそも人生に意味があるとするなら、それはこうした〈有限の生〉とわれわれが対峙していくことによってはじめて導出されるものであるはずである。われわれが真に必要としているのは、現実を否定する〈無限の生〉の理想などではない。本章では、それが「意のままにならない生」を引き受けてもなお、より良き〈生〉を希求していくことの意味、そしてその道に至るための“術”であるということを指摘したい。

そして本章では、この〈有限の生〉とともに生きるための“術”に関わるものとして、哀苦と残酷さに満ちたこの世界を生きることの救い、すなわち人間の〈救い〉というものについて、また、より良き〈生〉を希求する人々にとっての「美しく生きる」ということへの願い、すなわち人間の〈美〉というものについて考察しよう。その手がかりとなるのは、人間存在が「意のままにならない世界」のもと、「意のままにならない他者」とともに生きることを了解していく、〈世界了解〉の概念である。本章ではここで、人間の〈救い〉とは、われわれが〈有限の生〉の肯定と〈世界了解〉を果たしていくなかで、やがて〈自

己への信頼)へと至ることであるということ、そして人間の〈美〉とは、〈世界了解〉を成し遂げようと格闘していくなかで自覚されうる、その人自身の「生き方としての美」であるということについて見ていくことにしたい。

以上の【第五部】の議論において注目すべきは、本書でこれまで試みられてきたさまざまな分析が、最終的にいかなる形で統合され、総括されるのかということについてである。【第九章】では、それを日本社会というわれわれが生きる具体的な場に即して試み、【第十章】では、それをさらに「世界観=人間観」という包括的な観点のもとで試みる。われわれはここで、〈有限の生〉とともに生きるというひとつの結論を得ることになるが、ここでの考察は、最終的に「現代人間学」という方法論、そして「強度を備えた〈思想〉」の創出という、本書の原点となる問題意識に帰ってくることになるだろう。

なお本書では、下巻の巻末に二つの【補論】といくつかの【付録】を掲載している。このうち第一の【補論】は、〈自己完結社会〉の成立をめぐる本書の議論を踏まえたうえで、次の課題として浮上してくる〈文化〉の問題について述べたものである。また第二の【補論】は、本書に深く関わるいくつかの学説的論点、具体的には、「自由」、「疎外論」、「個と全体」、「自己実現」、「ポストモダン論」について、本文では描ききれなかった本書の学術的な立ち位置について言及したものである。そして【付録】は、本書の原点とも言える『現代人間学・人間存在論研究』の設立趣意、および各号に掲載された序文を再掲したものである。

## (5) 本書の底本と表記(文体)について

さて、以上を通じてわれわれは本書の全体像について一通り概観してきたことになる。ここでは最後に、本書の底本と表記(文体)に関する補足を行っておくことにしたい。

まず本書は、筆者を含む大阪府立大学「環境哲学・人間学研究所」の研究グループによる共同研究の成果であると言える<sup>(20)</sup>。筆者らは、2015年からこの研究所を拠点に本格的な共同研究を開始し、2016年からはその成果を『現代人間



表1 本書の底本と該当章

---



---

|   |
|---|
| ・【第一号】(2016)「現代人間学への社会的、時代的要請とその本質的課題——「理念なき時代」における〈人間〉の再定義をめぐって」<br>(→ 本書【第一章】、【第二章】収録)              |
| ・【第二号】(2017)「“人間”の存在論的基盤としての〈環境〉の構造と〈生〉の三契機——環境哲学と〈生〉の分析からのアプローチ」<br>(→ 本書【第三章】、【第四章】、【第五章】、【第六章】収録)  |
| ・【第三号】(2018)「人間的〈関係性〉の構造と〈共同〉の成立条件——「ゼロ属性の倫理」と「不介入の倫理」をめぐって」<br>(→ 本書【第七章】、【第八章】収録)                   |
| ・【第四号】(2020)「〈生活世界〉の構造転換と〈自己完結社会〉の未来——〈無限の生〉と〈有限の生〉をめぐる人間学的考察」<br>(→ 本書【序論】、【第九章】、【第十章】、【結論】、【補論一】収録) |

---

学・人間存在論研究』として刊行してきた。本書を構成している原稿は、いずれも「表1」のように、同誌に発表されてきたものを底本としている<sup>(21)</sup>。

なお、ここでは本書を読み進めていくうえでの注意点として、本書の表記ルールについても説明しておこう。例えば文中で【 】で示されたものは、【第一章：第三節】、【第六章：注20】といったように、本書全体の特定箇所を示す場合に使用されているものである。また、〈 〉で示されたものは、本書における“中核概念”、すなわち本書の理論的枠組みを理解するうえで中心的な役割を果たす概念のことを指しており、そこにはしばしば通常とは異なる独自の意味合いが込められている。さらに「 」で示されたものは、主として①他の文献などからの引用文、②引用に由来する特殊な用語／用法、③中核概念ほど重要ではない特殊な用語／用法に使用されている。これに対して“ ”は、特定の文脈上で読者に留意しながら読んでほしい強調の一種であり、必ずしも特殊な含意を持つものではないので注意してもらいたい。

多くの読者にとって、本書の文章は、決して分かりやすいものではないかもしれない。そしてその原因は、本書が高度に抽象的な議論を行っているからだ

けでなく、おそらく本書が“文体”を意識して書かれたものであることにも一因がある。つまり単に理論的／論理的な説得力を目指したのではなく、言葉そのものが持つ表現の部分を意識して書かれたものであるということである。とはいえ本書の【はじめに】や【序章】において、わずかでも何か響くものを感じ取ってもらえた読者には、ぜひ本書を一度最後まで読み切ってほしい。〈思想〉の書物においては、最も重要な主題や着想は異なる形で繰り返し取りあげられることになる。途中で理解できない一文があったとしても、読み進めるうちにイメージが共有されていき、文体のうちに込めた世界観や人間観が、突如として身近に感じられるときが来るかもしれないからである。

### 【注】

- (1) 一般的に“人文科学”という語は、自然科学や社会科学とは区別される、例えば哲学、文学、歴史学などの学問領域のことを指して用いられる場合が多い。ここではそれをより広く捉え、自然科学を除く、人間／社会を対象とするあらゆる知的営為を含むものとして考えている。
- (2) この一文を執筆している2018年時点で言えば、「アラブの春」の帰結としてのイスラム国の登場、日本人をも標的とするテロリズム、移民／難民問題がもたらした世界的混乱、自国第一主義の拡大、東アジアにおける国際秩序の動揺などが記憶に新しい。こうした事態を、10年前の人々はほとんど予見することができなかったはずである。
- (3) ここで言う“コスモポリタニズム（世界主義）”とは、全世界の人々が特定の国家、宗教、人種、地域社会などの枠組みを超え、全人類的な意識へと統合されることを指している。同様に“多文化共生”とは、人々の世界的な統合を達成するにあたって、それを主として多様性を包摂した相互理解を通じて実現すること、“国際平和”とは、国際社会において生じた紛争を、武力や経済力を用いた威嚇ではなく、公正な対話によって解決していくことをそれぞれ指している。こうした理念は、世界史的には第一次大戦以来の普遍主義的な理想を背景とし、さらに言えば第二次大戦の勃発、冷戦の出現といった形で繰り返し挫折を余儀なくされてきたものでもあった。グローバル化の時代、人々は世界がついにそうした理想へと結束することを期待していたのだが、われわれが知るように、人類がそうした「偉大な普遍」に至ることなどついになかった。世紀を越えてわれわれが目撃したのは、むしろそうした「偉大な普遍」こそが、ある種の“暴力性”を振りかざしていく皮肉な現実だったと言えるだろう。

- (4) 例えば2018年に行われた総合人間学会の第13回研究大会において、「科学技術時代における総合知を考える——文系学問不要論に抗して」と題して実施されたシンポジウムの趣意書には、今日の「文系学問不要論」の原因が、文系分野の学問に対する誤解や文系学問研究者自身の説明不足、そして何よりも科学技術万能主義や金融資本主義による利益追求への傾斜にあるとされている（総合人間学会 2018：6）。筆者は人文科学の側がこうした認識をこえられない限り、わが国の人文科学に未来はないだろうと考えている。そもそも人文科学は、人間が生存するための諸活動に直接寄与するものではない。このことは、それが必要であるという社会の意思と支援がなければ、人文科学そのものが存続できないということを表している。そのため人文科学に従事する者は、人間社会の文化的／意味的基盤の醸成を担うものとしての自負を持ち、そうした社会からの敬意と要請に応えていくための努力を怠ってはならないだろう。「文系学問不要論」が出現してきた背景のなかには、「今日の人文科学は、それだけの支援、あるいは尊敬に値するものではない」という、社会の側からの厳しいメッセージが含まれているように思える。それにもかかわらず、少なくない当事者たちは、その原因の一端が人文科学の側にもあるとは少しも思い至らないからである。
- (5) 例えば今日われわれが用いている“自由”、“社会”、“個人”、“権利”といった「日本語」は、すべて明治期に造られたヨーロッパ言語の翻訳語である（柳父 1982）。こうした翻訳語の整備は、当時の人々の多大な努力によってなされたものであったが、それによってわが国の人文科学は、西洋世界の知識文化との互換性を保ちつつ、母国語で実践可能なものとなった。こうした事例は非西洋文化圏においては希有なことであり、われわれはその事実を決して忘れるべきではないだろう。
- (6) 同じ翻訳文化といえども、戦後日本と明治／大正期の間には、深い断絶があるように思える。それは【第九章】でも見ていくように、前者が、戦前までの蓄積をすべて否定し、西洋世界への同一化をひたすら希求するものだったのに対して、後者は、西洋世界を参照しつつも、それをこの列島で培われてきた蓄積と融合させ、それによって自らの拠って立つ新たな道を模索しようとしていた側面があったからである。
- (7) もちろん「現代人間学」においても、既存の議論に対する位置づけを示すためには、一定の文献学的な注釈は必要となる。しかしこのことを強調したのは、われわれがこれまで文献学的な問題を優先するあまり、常々この「〈思想〉の創造」を蔑ろにしてきた過去があったからである。われわれが偉大だと見なす思想家の書物にあって、そのすべてが文献学的な精密さや体系性を備えているとは限らない。文献学的な誤りを含んでいるもの、体系化されることなく筆が置かれているものも数多く存在する。それでもなお、それらが後世に残されてきたのは、そこに新たな世界観を切り開き、

人々の内面に訴えかける〈思想〉としての潜在力があつたからではないか。「〈思想〉の創造」と文獻学的な精巧さは、ときに両立できないこともある。その意味においては、「〈思想〉の創造」を実験的に行う人々と、そうした試みを整理し、既存の知的遺産のなかにつなぎとめていく人々が相互に連携していく必要があるとも言えるだろう。しかしいずれにしても、わが国の知識社会において決定的に不足しているのは、やはり「〈思想〉の創造」を試みていく人々であると思われる。

- (8) 代表的な辞書によれば、“思想”とは、第一に「心に思い浮かべること。思いをめぐらすこと。また、その考え」を指し、第二に哲学的な含意として「思考されている内容。広義には意識内容の総称。狭義には、直接的な知覚や具体的な行動と対比して、文や推論などの論理的な構造において理解されている意味内容」、第三に「社会、人生などに対する一定の見解」のことを指すとされている（『日本国語大辞典』2007）。
- (9) 増田敬祐は、こうした〈存在の連なり〉のもとで〈思想〉の実践を試みることを「名付けられたものを名付け返す」と表現した。この言葉は【付録一】の「『現代人間学・人間存在論研究』発刊によせて」のなかにも収められている。またその真意については、文芸誌『夜半』に掲載の朝市羽客（2015）の論考も参照のこと。
- (10) この第二原則については、ある種の矛盾を感じる人々もいるかもしれない。なぜなら「人間存在の本質」を問うということは、時代を超えた人間の特性を掌握するということを意味しており、それはある種の普遍性を問題としているとも言えるからである。とはいえそれが、唯一絶対的なものとして提起されないという点にこそ、ここでの規定の本質がある。〈思想〉を言語理論によって表現するためには、ある種の「普遍化」は避けられない。第二原則が念頭に置いているのは、先の「絶対的普遍主義」と、こうした〈思想〉の形成に伴う「普遍化」とを厳密に区別するということなのである。この問題については【注13】も参照のこと。
- (11) もちろん伝統的な哲学の議論においても、多元主義という形で真理の複数性を主張しているものがある。しかしそこで焦点となるのは、例えば「真理の一元論と多元論のうちどちらが真理であるのか」といった論争、あるいは方法論上の問題として真理の特定が困難であるために、やむを得ず多元主義を採用するといった性格のものである。これらの思考の根底には、依然として「絶対的普遍主義」が横たわっていると言えるのである。
- (12) 【第九章】でも触れるように、西洋世界が依拠しているこの形而上学的前提は、われわれが想像する以上に根深い歴史的、文化的文脈を伴っている。それは遡れば、おそらく人間を称揚したルネッサンス期のキリスト教にまで行き着くだろう。
- (13) 例えば相互に矛盾をはらんだ「言説イ」、「言説ロ」が存在するとき、「絶対的普遍

主義」の立場から言えば、そのいずれかが間違っているか、あるいはその両方ともが間違っていて、未だ発見されていない「言説ハ」こそが「普遍的な真理」であるということになる。これに対して「現代人間学」においては、そもそも「普遍的な真理」としての「言説ハ」の存在を認めない。その代わりに「言説イ」と「言説ロ」のいずれもが、人間存在の「ある種の本質」を捉えている可能性があるということを重視する。つまりそこでは、たとえ矛盾する言説であっても緊張関係を保ちつつ共存できるのであり、これは「絶対的普遍主義」の立場からは決して導出されない帰結であるだろう。現時点でどれほど「正しい」とされている言説も、異なる時代においては「誤り」とされる可能性がある（当然、その逆もある）。またいかなる〈思想〉であっても、それが誕生したことには“理由”がある。ある時代に、ある属性の、ある立場に立つ人間が、ある動機のもとで「何ものかが重要である」と切実に思案した。それだけのことであっても、そこには時代の要請するある種の“必然性”がある。それは「絶対的普遍主義（普遍的な真理）」とは異なる、限定された意味合いにおける、ある種の「普遍性」である。と同時に、そうした時代の“必然性”は、常々一見他愛のない人々の生活の細部において表現される。そのような意味において、個人的なことは「普遍的」なことであり、「普遍的」なことは個人的なことである、とも言えるだろう（【補論二：注62】も参照）。特定の〈思想〉を「肯定する」ということは、そうして紡ぎだされる何ものかを「正しい」と見なすことではなく、それが存在する“理由”を理解するということなのである。本書で言う「強度を備えた〈思想〉」についても、それををはかる絶対的な基準は存在しない。例えばある人々が「言説イ」を見て称賛しても、別の人々はそれを見て批難することになるかもしれない。だが、それでいいのである。来たるべき何ものかが、これからもより良き〈思想〉を紡ぎあげ、変わりゆく時代の要請にきつと応えてくれるだろう。「現代人間学」は、そうした信頼に立脚しているからである。

- (14) もちろん、ここでの主張は万人に対してのものではなく、あくまで「〈思想〉の創造」に従事すべき人々に対して向けたものである。「〈思想〉の創造」は誰にでもできるものではない。しかしそうした能力がありながら手をこまねいている人々がいるのだとすれば、そうした人々にこそ、筆者はこの言葉を投げかけているのである。なお、こうした実践の側面のことを、筆者は吉田健彦の言葉を借りながら「とどまる思想」と呼んできた。この言葉は【付録一】の「『現代人間学・人間存在論研究』発刊によせて」のなかにも収められている。
- (15) 筆者がここで敢えてこのように表現したのは、國分功一郎（2015）や千葉雅也（2017）といった近年の識者が、決断主義をあまりに否定的なものとして位置づけてい

るからである（なお、他にも決断主義を論じたものとして宇野常寛（2011a）があるが、彼の場合はやや異なる位置づけが必要であると思われる。というのも宇野にとって、決断主義は「ポストモダン」的状況への必然的な応答として、一度は通過しなければならないものとして位置づけられており、焦点となっているのは、そうした決断主義的状況を所与として、なお人々がいかにしてより良き生を実現できるのかという部分であるように思えるからである）。彼らにとって決断主義とは、自らが抱えるべき確かな準拠点がないとき、暫定的にせよ、“決断”によって特定の命題や枠組みを自らの準拠点とすることを指している。そして両者は、そうした態度が何ものかに対する盲目的な絶対視であるがゆえに危険であると主張する。しかしそうした事態があるとすれば、それは決断主義が現実との格闘を拒絶し、現実否定の理想主義に没入したときであるだろう。むしろ何ものかに対する“決断”がなければ、〈思想〉を創造していくことなど不可能である。そもそも有限な存在としての人間は、いつの時代も何かを“決断”することに迫られてきた。さまざまな選択すべき局面において、真に絶対的なことなど、人類は一度たりとも知りえたことはなかったからである。“決断”なしに人間が生きることなどありえない。重要なことは“決断”そのものの善し悪しではなく、いかに“決断”するのかということだろう。

- (16) 言語を駆使する〈思想〉の形態として、他にも“詩”や“文学”という表現方法がある。〈哲学〉が、言語の持つ理論や論理性の力を生かした表現方法であるとすれば、詩や文学は、言葉それ自体の、あるいは物語の持つ響きの潜在力を生かした表現方法であると言えるかもしれない。
- (17) 実際、“理性”や“自由”を含む先の基礎概念がその有効性を保持することができたのは、その背後に西洋近代哲学という、強力な「世界観＝人間観」が担保されていたからである。
- (18) この二つの立場のうち、最も極端なケースは、ブルーマー（1991）——人々が有意義なシンボルを用いて主観的に行う相互作用に着目し、社会をそうした相互作用の動的な“過程”として理解しようとした——とマルクス（1956）——法や政治のみならず、人間の意識のあり方さえも、その背後にある生産様式や生産関係といった“社会構造”によって規定されるとした——であるだろう。
- (19) 例えば社会生物学論争の根底にあったのは、進化論や生物学の知見が、自由、理性、人権といった、西洋近代が築きあげてきた核心的価値理念を破壊するかもしれないという恐れであった。詳しくはセーゲルストローレ（2005）を参照。
- (20) ここでの研究グループとは、具体的には大阪府立大学「環境哲学・人間学研究所」、「現代人間学・人間存在論研究部会」（<https://gendainingengaku.org/>）を構成している

筆者、増田敬祐、吉田健彦の三名のことを指している。筆者と両氏との関係については、【おわりに】を参照してほしい。

- (21) ただし一連の成果を本書にまとめるにあたって、大幅な加筆修正をおこなった箇所もあれば、修正すべき論点でありながら、筆者自身の思考の軌跡を残すという意味において敢えて修正しなかった箇所もある。例えば【第一章】の「成長しない世界」についての言及は、当初はそれなりに意味を持つものだったが、執筆を進めるにしたがって後退していった論点のひとつである。【第十章】で見えていくように、筆者はある面において、われわれが〈自己完結社会〉の成立を止めることを望んでいないのではないかと感じている部分がある。われわれが〈自己完結社会〉を望んでいる限り、その先に残されているのは〈社会的装置〉との“共生”という道であって、そのためには、おそらく当面の間は経済成長の持続が不可欠となるように思えるからである。

